

詩集

春の妖精

宮崎裕子

## 春の妖精

---

ぽろ ぽろん ぱらり。。

ソファでお昼寝をしているのは

この家の女の子

はちみつ色の夢をみています

ぱらん ぽらん ころころ

不思議な音がお部屋に小さく響きます

ぱちっ ぴちっ かつん

やがて女の子は目を覚まし

あたりをぐるりと見まわしました

「誰か呼んだかしら？」

天井も

クリーム色の壁も

テーブルの上のオレンジもそのままです

女の子が立ち上がろうとすると

膝の上の絵本が床に落ちました

絵本を拾おうとすると小さな声がしました

「ねえねえ はやく庭にいこうよ」

「え？」女の子は声の主を探しました

「庭だよ。君の家のさ」

おそるおそる声のもとをたどってみると

女の子が座っていたソファの上に  
きれいな緑色のズボンと薄いピンクのブラウスを着た  
小さな小さな男の子がいます

金色の巻き毛があちこちにくるくと伸びていて  
愛らしい男の子の顔を囲んでいました

「なんでお庭なの？」

女の子が訪ねると  
男の子は黙って窓の外を指差し  
しーっと唇に指をあてました

「小鳥たちに見つかるよ」

女の子は男の子を手のひらにそっと乗せると  
キッチンのドアを開けて庭へ出ました

すみれの花の匂いがかすかにして  
女の子はくらくとしました

芽吹いたばかりの緑が あちこちで  
ゆっくりと伸びをしたり  
あくびをしています  
地面からやっと立ち上がってつるを  
絡ませようとしているのは  
エンドウ豆たち

黄色い水仙の花や薄紫のムスカリも  
おしゃべりに夢中になっています

寒い冬を越した庭は

いつのまにか 美しい花園に変わっていました

女の子の顔が薔薇色に輝いて

ゆっくりと笑顔に変わっていきました

「これを見せたかったのね」

手のひらの小さな男の子は

春の妖精でした

男の子は女の子の手の平から

軽々とレモンの木に飛び移り

鈴の音のような

かわいらしい声で笑い

あっという間に見えなくなりました

気づくと

女の子の手の平には

小さな緑色をした豆が一粒

それはまるで

さっきまでそこにいた

小さな男の子のようでした

## お砂糖くん

ここは、ティータイムのお茶やお菓子たちの国。

或る日のお茶の時間、

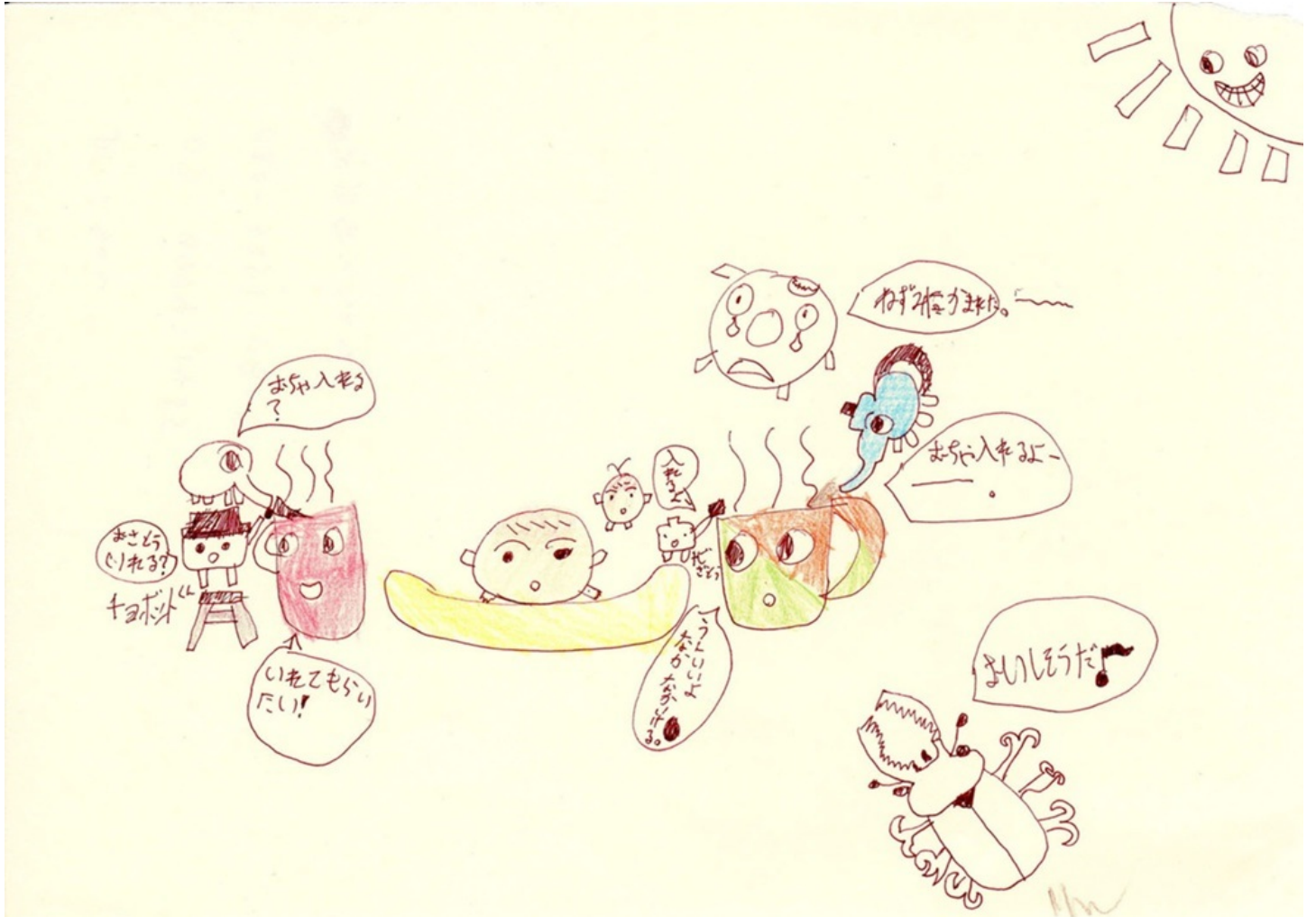
窓辺に一人で座っていたシュガーポットのお砂糖くんに、  
「ねえねえ、お砂糖くれない？」 とカップ君が言いました。

「うん。いいよ。」と シュガーポットのお砂糖くんは にっこり笑います。

お砂糖くんは自分で頭のとっぺんにあるオレンジ色の蓋をとると

茶色い でこぼこした角砂糖をひとつ カップくんにあげました。

カップくんは、「ありがとう」と言って、角砂糖をばいっとカップの中に ほおりこみます。



「うん。 いい感じ」

カップくんは満足そうに にっこり。

「ちょっと つまんなかったんだ。」 カップくんは言います。

「でも お砂糖をもらったから 元気になったよ」

シュガーポットのお砂糖くんに嬉しそうに微笑みました。

お砂糖くんも「よかった～」と にこにこしています。

世の中、ちょっぴりのお砂糖みたいな優しさが ほしいと思います。  
ほんとは みんな持っているんだけどね。

## 頭の中のアイスクリーム

---

自分の頭の中には何が入っていると思う？

例えば

恋をしている人の頭の中には

赤く熟した苺やさくらんぼ リキュールやワイン

地図帳やカレンダー 辞書 ばらの花 夜の星空

わたあめみたいな雲 夜のカフェ ため息

それから いい匂いのする森の風や夏のプールなんかが入ってる と思う

小さな子供の頭の中は

なめても減らないアイスクリームやドーナツ

お日さまに透ける緑の葉っぱ

だんごむし かぶとむし かたつむり

クレーンやミキサー車とそれを運転している自分

たくさんのクエスチョンマーク

大好きな ママとパパも もちろん。

アーティストの頭の中には。。

## poipoi (ポワポワ)

---

poipoi 今日もお散歩

くるみの木

トプカプ トプカプ 宝物

あそこの角まで競争しましょ

ゆるっと走ってひとまわり

風と一緒に

小鳥と一緒に

あなたと一緒に

poipoi 今日もお昼寝

いい気持ち

おひさまの匂いのおふとん

おやつはなにかな～

## 素直な猫

---

あたしは 猫

素直な猫

呼ばれたら すぐに飛んでいくわ

あなたは 変だというけれど

お掃除 洗濯 なんでもやるわ

お料理だってするわ

君は確かに猫なのに

なんでそんなに 真面目なの？

あなたは 笑いながらそう聞いたわね

私はたちまち不安になって

体中を身繕い 髪の毛をなでつけてしまう

真面目な猫だっているのよ

猫はね いつでも孤独を愛するの

猫はね いつでも寂しがり

猫はね かまってくれないと元気がでないの

面倒をみてくれる人がいないとダメみたい

あたしはノラじゃないんだわ

あなたの 猫なのよ

ときどきは 美味しいワインを飲ませてね

もちろん とびっきりのバゲットも一緒にね

あなたの膝に自由に飛び上がらせてね



たっぷりと愛情こめて 撫でてちょうだい

甘やかしてくれるなら

これからも 真面目な猫でいるわ

君の悲しみが癒せたなら。。

---

空から

むらさき みずいろ 灰色のしずく

君の

悲しみが 癒せたなら。。。

乾いた大地を 潤して

さくらんぼの実がなる頃に 会いに行くよ

# 雨があがる

---

雨 が あ が る

僕 は 水 た ま り に 足 を つ っ こ ん だ ま ま そ れ で も

な ん と か 顔 を 上 げ 空 を 見 る

空 は 高 く

空 は 蒼 く

空 は 果 て し な く 広 く

雲 は 堂 々 と 風 を 受 け て 流 れ る

み ず い ろ ば ら い ろ 鼠 い ろ に オ レ ン ジ

さ ま ざ ま な 色 に 変 化 す る 雲 た ち 鳥 た ち の 声

固 く て 冷 た い 大 粒 の 雨 を ふ ら せ た 空 は

い ま は 知 ら ん 顔 し て 明 日 の ほ う を 向 い て い る

僕 も 今 日 か ら 明 日 へ 歩 い て い こ う

虹 の 橋 は な く て も

自 分 の 足 で 歩 い て い く

そ れ は な ん て 素 敵 な こ と だ ろ う な ん て わ く わ く す る ん だ

僕 は 自 分 の 人 生 を 生 き て い る ん だ

## レンゲの花

---

明るい野原

レンゲの花畑の中で

おとうさんと おかあさんが笑ってる

お弁当を食べて 笑ってる

わたしも やっぱり笑ってる

ちいさい妹と走り回りながら。。

みんなでいるのが嬉しくて

機嫌がよいのが嬉しくて

空にはたくさんの小さな白い雲

明るい野原で

レンゲの花が揺れていた

風に吹かれて揺れていた

# あめのはながさくどようび.....

---

つめたい あめ ほほを ぬらす

あめ の どようび

そらいろ にびいろ しんじゅだま

はな さく どようび

そふあ の うえ

もうふに くるまる

めを とじて あめの おとを きく

